三々五々

谷川俊太郎

＊三々五々（さんさんごご）

初版第一刷＝一九七七年六月三十日
著者＝谷川俊太郎（たにかわしゅんたろう）
装幀＝著者
題字＝谷川徹三
発行者＝大久保憲一
発行所＝株式会社　花神（かしん）社
東京都千代田区猿楽町二―二―五
興新ビル六〇五　電話二九一・六五六九
印刷所＝工友会印刷所十コーエー
製本所＝今泉誠文社
用紙布＝文化エージェント十金池
一九七七年©　Printed in Japan
0095-770106-1092

目次

飯島耕一——呼びかける声　9
石原慎太郎——苛立ちと〈何か〉　14
石原吉郎——〈文章倶楽部〉のころ　30
市川崑——市川さんの眼　38
今江祥智——にぎりしめたてのひら　41
岩田宏——勝手な想像　47
江藤正明・志津恒応——『手のように』について　49
大岡信——『彩耳記』　51・〈声のパノラマ〉に始まる……　56
柿沼和夫——静けさ　63
梶原しげよ——一羽の鳥　64

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c

粕谷栄市――粕谷さん　66
金子光晴――『愛情69』　67・金子さんに　69
北川幸比古――あらゆるものの影が……　72
北原白秋――白秋寸感　75
草野心平――草野さん　79
坂上弘――雲間の……　81
志賀直哉――鏡　82
篠原一男――本質的な本　85・十年　89
鈴木博義――黒いフォードの記憶　93
高田博厚――『人間の風景』　96

高橋睦郎——跋　98
武満徹——武満徹氏を訪ねて　100・武満徹と　107・Where is he?　112
立原えりか——蝶を編む人の灰色のショール　122
谷川徹三——父の一面　131
田村隆一——田村さん　133・らくだのチーズ　135
長新太——思い出の記　141
手塚治虫——『ぼくはマンガ家』　143
寺山修司——もつものともたざるもの　145・日本的心性の正統性　147
友竹辰——解題　148
友部正人——フリスビーと空部屋　149

中江俊夫——un croquis 154・中江俊夫再考 158
永瀬清子——永瀬清子の来た道・展 182
西村宏一——贅言 183
野上彌生子——妖精 186
萩原朔太郎——なつかしい一人の人格 189・ごはん粒をこぼす人 190
萩原朔美——FADING 196
波瀬満子——…… 197
長谷川龍生——『虎』 199
久生十蘭——『黄金遁走曲』 202
星新一——にがい味 205・魂のありか 207

三木卓――『ほろびた国の旅』を読んで　212
三好達治――弥生書房版詩集後記　215
山川方夫――山川さん　220
山口洋子――Y・Y　222
山本太郎――『サハラ放浪』　224
湯浅譲二――セッサタクマ　227
吉田健一――『詩に就て』　230
和田誠――静かな誠　233
あとがき　236

三々五々

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c

飯島耕一

*呼びかける声

古い手紙の束の中から、飯島からの手紙を二通探し出してきた。一通は一九五三年十二月、他の一通は翌年六月の日付をもっている。本棚からは一九五五年発行の詩集『わが母音』を、久しぶりに出してみた。三番目に、谷川俊太郎にと記された「絶望の色を切離す手」がおさめられている。今、読み返してみて、〈ぼくらはゆたかな沈黙を愛するが黙りこくった時を愛さない。〉という二行が、素直に心にしみた。

彼の第一詩集『他人の空』は一九五三年十二月、私の第二詩集『六十二のソネット』と同じ時期に発行されている。思潮社・現代詩文庫版の飯島耕一詩集に付せられた年譜メモには、一九五四年、詩集を出したことから、清岡卓行、谷川俊太郎を知る。とあるが、実際に会っていたのか、それとも手紙のやりとりだけであったのかは、私ははっきり憶えていない。

しかし、『他人の空』の中の、飯島の〈空〉と、同じ時期の私自身の作品の中の私の〈空〉とのちがいについて、手紙の交換をしたことは今も印象深い。私は飯島の〈空〉を主に昼間の曇り

空としてとらえ、自身の〈空〉を青空、星空として、そのふたつを比べたのだった。

空は石を食ったように頭をかかえている。

〈他人の空〉

砂くちばしのように
空が垂れ下ったり拡がったりしはじめた年。

〈空〉

涙ぐんだ空、なかでも埃まみれの絨氈の空、
可哀そうな空、おびただしい血の乾かぬ空、
呪われた空、人々が破壊にのみ執した空を。

〈埃まみれの空〉

そういう飯島の〈空〉に対して、私の〈空〉はたとえばこんな風だった——

あの青い空の波の音が聞えるあたりに
何かとんでもないおとし物を

僕はしてきてしまったらしい

〈かなしみ〉

空が降下してくる
厚い幕のむこうに無数の星の気配がする

〈暗い翼〉

空の青いところへたどり着くと
きっと誰もいない
あれは恵み深い嘘なのだ

〈ソネット34〉

そして飯島は手紙にこう書いてきた。〈君のいう「雪空はかえって安心出来、晴れた星空ほど恐しいものはない」という言葉は、充分僕にもうなずけることでした。僕はそこで、いわなければならないのですが、君の作品の空（実は断片的にしか読んでいないのですが）も、人間的な意味に充ちようとしていることを、やっと発見したことです。（中略）ところで、僕は君の詩にも、もっと人間臭さと、生活者としての叫びがほしい（同時に、僕の問題でもありますが）と思うのです。君の詩もやはりきれい過ぎる……〉

数年後に書いた「アルファベット」というエセイをきっかけに、飯島がこうむることになる〈現実逃避的〉とか〈外国文学の木登り〉とかの批判を、彼はとっくに自身の問題として先取りしていたように私には思える。大学というひとつの連帯の場と無縁であり、時代という状況よりも、宇宙という与件に先ずとらえられて詩を書き始めていた私の眼から見ると、飯島の曇り空は十分に人間臭かったのだが——

『他人の空』の中の五篇の詩、『わが母音』の中の三篇の詩が友人への献辞をもっている。飯島の詩を考える上で、これは私に興味深い。飯島は熱心に友人たちに呼びかけていたと思う。それに答え得た者もあっただろう。けれど私には、呼びかけてくれた飯島にうまく答えることができなかったという、ひそかな悔恨がある。〈俺はひとりで生きてゆけるんだ〉という、私の若さゆえの傲慢もあったが、『他人の空』に感動し、共感しながらも、なお微妙な違和感が私にあったことも否めない。

気質のちがいといってしまっては身もふたもない。飯島が仏文の学生であり、フランス近代文学の影響を、なかんずくシュールレアリスムの洗礼を受けていたことが、主な理由だったのではないかと、今の私はそう考えてみる。日本語のむこうにフランス語が透けて見えていた人間と、日本語しかもち得なかった人間とのちがい——今でも私は時々飯島が日本語固有の能力に私などのもつことのできぬ幻想を、といってわるければ夢をもっているのではないかと思うことがある。

〈一九六五年十月のある夜、ぼくはとつぜん詩を書こうという自然な気持にとらえられた。その日の夜あけ前の二時間に、ぼくは第一の詩をほとんど一行の書きかえも行わず書いた。翌日の

深夜にも、ふたたび可能なかぎりオートマティックな記述を行って（可能なかぎりと言うのは、記述にあたって、たえず自分から離れようという意識だけは明確だったからだ）第二の詩を書き、こうして五つの夜連続して、ほぼ同じ時刻に、毎夜一つずつ詩を書いた。〈『夜あけ一時間前の五つの詩他』のこのあとがきは、そこに何のてらいもないからこそ、私にあるくすぐったさ、てれくささを感じさせるようだ。

話はちがうが私の「詩人たちの村」中の一篇にある〈ひとつの行から他の行へたどり着いた連中はどういうわけか妙に気軽になっていて〉という一節を、どうも私はなんとなく飯島を念頭において書いたふしがある。そんなシニカルな一行で、彼の呼びかけに答え得たとはもちろん思っていないし、私の中には多分に羨望がまじっていたのだけれど。

《今日》《鰐》が解体したあと、飯島は《櫂》にむしろ積極的に近ずき、同人となった。献辞の多い飯島、年譜の中で結婚には一言もふれず、友人たちとの出会いを克明に記した飯島、私は今もなお飯島の呼びかける声を心に聞く。彼は言葉を愛し、言葉を信じ、その言葉によってむすばれている同志の詩人たちに語りかける。詩人たちのための詩人という一面が彼にはあるような気がする。

飯島にも詩の書けぬ時期はあるだろう、意識して詩を書かぬ何ケ月かもあるかもしれぬ。だが彼はいつかまたきっと詩を書きついでゆく。彼の書く詩の内部には、そういうことを人に信じさせるあるたしかなスポンタニティがある。

（山梨シルクセンター出版部刊飯島耕一詩集Ⅰ『他人の空』月報・一九七一年）

石原慎太郎

*苛立ちと〈何か〉

何故か私は充足した石原を見たことがないような気がする。私の記憶の中では、石原はいつも苛立っている。苛立っていなければ石原ではないと、私には思えるほどだ。私と石原とのつきあいは深いものではない。私は彼の限られた一面しか知らない。どこか私の知らないところで、石原も充足することがあるのだろうか。寛ろぐことがあるのだろうか。私のイメージの中では、石原はいつも何かを叫び出しそうにしている。そして石原の文章を読む時にも、私のその印象は変らない。かえって、ますます強められることが多い。

その苛立ちには、神経症的なものも少しは入っている。チックというのか、眼をぱちぱちさせる癖が石原にはあって、それは時々彼の明るい、自恃を感じさせる笑顔にそぐわなかった。だが、私にはそれは表面的なことにしか思えない。彼の苛立ちはもっと深いところにあって、いわば全人格的な苛立ちとでも言えるのだ。〈アングリィ・ヤング・メン〉という呼び名が輸入せられた頃、その名を聞くたびに私は反射的に石原を思い浮かべるのが常だった。ウェスカーやブレイン

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c